

朝の法話

第八回

七月十日

全校の皆さん、おはようございます。

先日第四十二回の西高祭が幕を閉じました。激動の4日間振り返ってみると、準備・本番・片付けの中いろんなことがおこり、その度に悩み、考えたことでしょう。しかしその経験がどれも自分をつくっていることは確かです。今回のことを生かせるかどうかは、これからの自分次第ということですね。

さて、そんな西高祭ですが、一般公開には沢山の方にご来校いただきました。また、この時期は進学や就職の関係で外部の方が学校へ出入りされます。そんな本校に来校された方々が異口同音に「伊那西高校は綺麗な学校ですね」とおっしゃって下さいます。決して新しい校舎ではありませんが、学校が綺麗と感じて下さるのは、ひとえに皆さんが日々、丁寧にお掃除をしているお陰だと思っています。

親鸞聖人の「み教え」に出会えた心の世界を、榎本栄一さんという方が「ぞうきん」と題しこんな詩を書かれました。

ぞうきん

ぞうきんは 他のごれを

いっしょけんめい拭いて 自分は よごれにまみれている

私たちの教室にはぞうきんがあります。学校に持ってきた時は、真っ白なきれいな布でした。それが汚れてしまったのは、ぞうきん自体が汚かったのではなく、他の汚れを拭き取った結果です。他の汚れを自らの体に吸い込んで、周囲を輝かせている存在といえます。

私たちの周りを見渡してみると、まず目に付くのは華やかなもの、綺麗なものの、キラキラと輝くものです。でも、キラキラと美しく輝くことができるのは、表面には出てこないけれども、汚れを拭いてくれるような存在があるからなのです。

このことは先程の「学校が綺麗」ということはもちろん、私たちが今、こうして生きていることにも通じる部分があります。私たちは、日々何かに支えられ、生かされています。しかし普段、あまりそういうことには気づきません。むしろ自分のことしか考えられないのが私たち人間です。

しかし、そんな私たちであっても、文句を言わず黙って私たちを輝かせてくれる存在があるのです。その尊さに気づき、そこに「本当の美しさ」を見い出せる、そんな人間に成長していきたいものですね。